北部太平洋　日本海座棲生物調査

担当者　技　師　富永武治
〃　沢田兼造
〃　赤羽光秋
東奥丸船長　高井英和

Ⅰ　目　　的

本県北部太平洋及び日本海北部漁場における座棲魚族の時期別，深度別魚獲組成等移動状況等を調査し当業船の指導に当ると共に底曳漁業の発展に寄与せんとするものである。

Ⅱ　調査の方法

1. 試験船　東奥丸　38.35トン　b120PS
2. 乗組員　船長以下　10名
3. 調査期間　自　昭和41年　4月　1日　至　昭和41年5月14日
　　〃　年12月18日　〃　42年3月31日
4. 調査海域　日本海（青森県沖合）
5. 漁　具　1艘成機船底曳網　1ケ流

Ⅲ　調査経過

東奥丸は前年度の座棲生物調査に引続き春季における同調査を実施し5月12日を以って春季底曳調査を打切った。

4月1日から5月12日までの春期調査における操業日数は14日で曳網回数は51回を数えたが，総漁獲量はアブラザメを主体に僅か1,045Kg（1曳網当り16.9Kg）であった。

冬期間における底曳調査は12月27日より調査を開始した。翌年3月31日までの期間中において操業日数23日曳網回数99回（内曳網不能回数9，9回（内曳網不能回数7回）総漁獲量は12,614Kg1曳網当り137.1Kgであった。

Ⅳ　調査結果

本年度東奥丸による春季，冬季別，月別操業日数，曳網回数，漁獲量及び1曳網当り漁獲量は次表のとおりであるが，春季と冬季の1曳網当り漁獲量をみてみると極端な差が示されている。

又冬季間における1曳網当り漁獲量を前年度と比較してみると本年度の137.1Kgに対し前年度は152.1Kgで本年度は1曳網当り15Kg程前年度より少なくなっている。

項目＼月	4　月	5　月	計
操業回数	12日	5月12日まで 2日	14日
曳網回数（　）内は曳網不能回数	51回(1)	12回	63回(1)
漁獲高	961Kg	84Kg	1,045Kg
1曳網当り漁獲量	19.2Kg	7.0Kg	16.9Kg

項目＼月	12月	1　月	2　月	3　月	計
操業日数	1日	5	9	8	23日
曳網回数（　）内は曳網不能回数	3回	20(1)	38(3)	38(3)	99回(7)
漁獲高	48Kg	5,769	3,900	2,897	12,614Kg
1曳網当り漁獲量	16.0Kg	303.6	111.4	82.8	137.1Kg

春季における漁獲物の主な魚種組成をみてみると，アブラウノザメが340Kg（32.5％）で首位を占め，ハタハタ，119K（11.4％）カレイ類119K（11.4％），スケソウ100Kg（9.6％）エイ88K（8.4％）平目46Kg（4.4％）星サメ27Kg（2.6％）その他となっている。

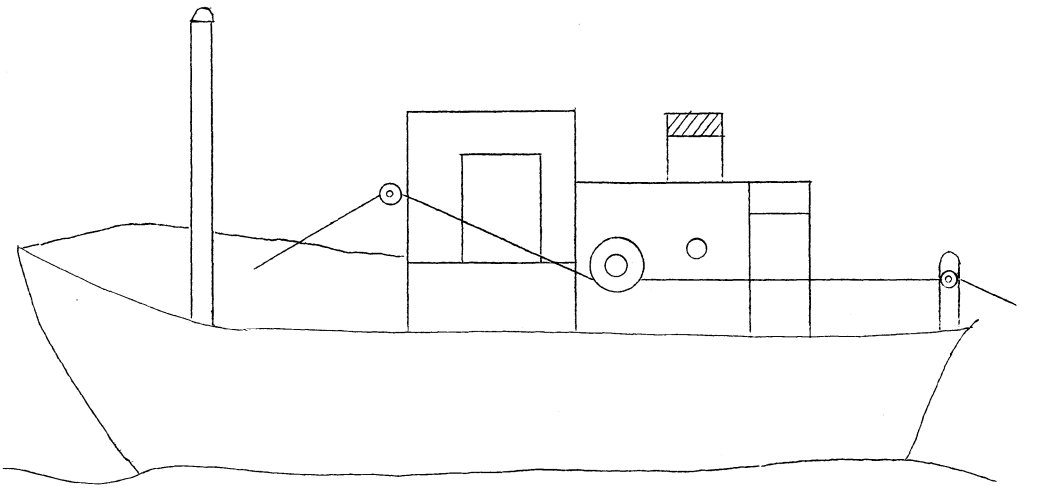
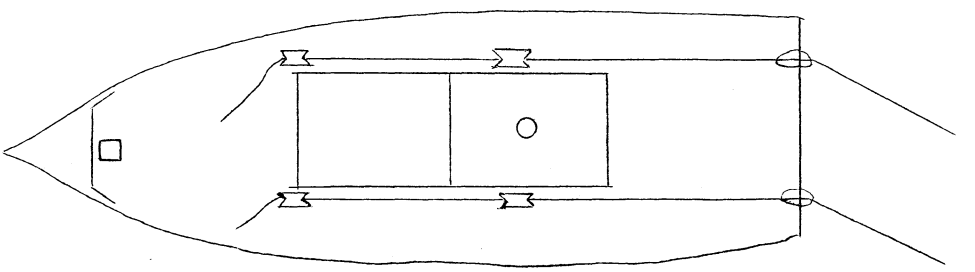
冬期における漁獲物の主な魚種組成としてはアブラウノザメ7.917Kg（62.8％）マダラ2,372Kg（18.8％）ハタハタ65.5Kg（7.7％）スケトウ447.5Kg（3.5％）その他となっており，これを前年度と比較してみると，アブラツノザメが前年度の94％，でマダラは77％，スケトウは88％で何れも10％～20％程度少なくなっているが，これ等に代ってハタハタの漁獲が前年度皆無だったのに比べ本年度は655.5Kg漁獲された。

V　考　　察

本県日本海沿岸の深浦，鰺ケ沢両地区における沖合底びき網漁業の現況は深浦，鰺ケ沢両地区経営形態の点において大きな違いが見られている。

即ち深浦地区においては底びき漁業の開始当初より5人組，7人組と組織を作って漁船の建造から漁具の整備まで共同出資に依り本漁業が行われ各々出資者がその乗組員となって利潤の配分が行われているため現在のところ余り問題がないのであるが鰺ケ沢地区においては最近乗組員をやめて出稼に行くものが多くなり，現在6人～7人で操業する段階にいたっている。又，深浦，鰺ケ沢地区共に底びき船が大型化してきており使用する漁具（ロープ類）も太いものを使用しているにかかわらず，これとは逆に乗組員も老齢化してきているために業者間においても省力化が真剣に考えられている。現在，鰺ケ沢地区底曳船は省力化の1段階としてドラムの前方にオートローラー（自動ステ取り機）を設けて操業しているが，今後は更に艙取りのロープをコイルにするロープ処理機の試

験を実施するべく，目下考慮中である。

この漁業においては，老令化不足化している労働力の現状から省力化が望まれるが，最も適切な漁具漁法の改善研究が今後の研究課題となろう。

オートローラ取付図